

教育研究業績書

2023年10月23日

所属： 応用音楽学科

資格： 准教授

氏名： 大澤 智恵

研究分野	研究内容のキーワード
音楽教育学	鍵盤楽器, 演奏技能, 記憶, 知覚, マルチモーダル
学位	最終学歴
博士(教育学)	新潟大学大学院 現代社会文化研究科 人間形成文化論専攻 単位取得退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 武庫川女子大学音楽学部「音楽心理学」	2018年4月から現在、前期のみ	音楽をする心のしくみやはたらきについて、聴覚の解剖学的基礎から音高の知覚、音楽の感情認知、アンサンブル、演奏技能、あがりなどのより実践的な話題まで、幅広く取扱った。各自に研究テーマをもたせ、授業外に調査したことを発表させたり、グループ毎の実験実習により、音楽に関する行動や反応について科学的に検証する一連の体験ができるように工夫した。
2. 武庫川女子大学音楽学部「ピアノ実技1A, 1B」	2018年04月から現在	ピアノのレッスンをおこなっている。レッスン時には、読譜や運指、解釈や表現方法などに関する事項などを扱い、教員から指摘することもあるが、時間の許す限り、学生自身の問題意識や、演奏に対する希望を言語化することを促し、それらを解決したり叶えたりするためにどうしたらよいかを考えさせ、それをベースにレッスンすることを心がけている。
3. 武庫川女子大学音楽学部「演習」(3年ゼミ)	2018年04月から現在	翌年度に作成する卒業論文に向けた3年生のゼミで、取り扱うことが可能なテーマや、音楽心理学・音楽教育学の領域の研究トピックやジャンルなどについて概要を解説したのち、各自の関心を可視化して整理するマインドマップの作成を経て、文献調査、研究方法の学習などを進めさせている。授業時には、発表者をきめてスライドを用いて口頭発表をさせたり、口頭で各自の進捗を報告させながら全員で関連する問題についてディスカッションしたり、読むべき文献や書籍、考えるべき問題について教員から提案したりしている。
4. 武庫川女子大学音楽学部「ソルフェージュ1A, 1B」	2018年04月から現在	聴音、視唱、リズム打ち、伴奏付けなどの課題を取り扱っている。次週までの予習の宿題を課したり、特に試験の具体的な内容をイメージさせながら、自身の到達度を把握し後から一覧できるようなシートを作成し、モチベーションとメタ認知能力を高める工夫をしながら授業を進めている。
5. 武庫川女子大学音楽学部「音楽科指導法I-IV」	2017年04月から現在	中学・高校での音楽科での指導法を扱い、第2・3学年の前期・後期からなる。学習指導案の作成にあたっては、各項目の内容を学習指導要領に沿って適切に記述できるように全員の指導案を添削し、また、PCでの文書作成もより適切にできるよう指導している。模擬授業では、授業者だけでなく生徒役に回る際にも、さまざまなタイプの生徒の役作りを意識的におこなうことで、生徒理解力、観察力の素地となる視点が得られるよう考慮している。
6. 武庫川女子大学音楽学部「音楽教育学研究」	2016年04月から現在	応用音楽学科に所属する学部4年生を対象に、音楽教育学の分野全般に関する概論、調査の方法とまとめ方についての演習をおこなっている。受講生の卒業研究のテーマや要望に応じて扱う題材を選定し、研究論文や音楽教育に関する書籍の章などを取り出して講読を進めている。
7. 大阪音楽大学「ピアノ指導法」(「音楽指導者のための人間発達論」)	2016年4月から2020年09月、前期のみ	ピアノ指導者コースの学生を対象にした、幼児期から児童期にウェイトを置いた発達心理学の講義をおこなっている。全体の8割ほどの時間は、胎児期・乳児期から老年期に至る各段階の認知、社会性などの特性や

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
8. 武庫川女子大学音楽専攻科「楽書購読」	2016年04月から09月、2018年04月から現在	<p>発達課題などを扱い、また2割程度の時間は、聴覚や音楽の演奏に必要となる知覚、認知、運動制御の諸能力の発達、創造性や芸術的能力の理解など、音楽に関係の深い内容を重点的に扱い、将来の指導のベースになるような知識体系の育成を目指している。</p> <p>専攻科生を対象に、音楽（あるいは音楽教育）に関する様々な文献を探し出して入手し、読解し、自らの考察を深めたり見解を文章として書いたりすることができる能力を高めることを目指して実施している。教員の提供した文献をもとに議論する場合と、学生自らが選んだ文献に関して議論する場合があります。どの場合でも、常に調査研究の一環として主体的、相互作用的に議論をおこなうこと、将来プロの音楽家として一歩踏み込んだ考察をしたり、情報を発信したりすることができる力をつけることを念頭に置いている。</p>
9. 流通科学大学サービス産業学部「エンタテインメント演習」および「レクリエーション演習」	2011年04月から2014年07月（エンタテインメント演習：前期のみ、レクリエーション演習：2012年度後期のみ）	<p>様々なエンターテインメントの資質を身につけるための演習で、音楽分野を担当した。音楽を専門的に学んだ経験のない学生が受講者の大半であった。音楽によるもてなしの場面で、相手をリードしながら歌や演奏で人を楽しませることができるようになるための基礎的な音楽能力、ボディパーカッション、音楽を取り入れた寸劇の実践など、幅広く音楽とその演出の能力を高められるよう学習内容に工夫した。</p>
2 作成した教科書、教材		
1. 武庫川女子大学音楽学部「ピアノ実技1A, 1B」	2018年04月から現在	<p>学生の課題状況を見て、必要に応じ電子ピアノとPCを利用して、演奏のMIDI情報を記録し、ある指が隣の指につられていたりと思われる箇所、局所的に無意識的に速くなってしまっている箇所など、打鍵やペダリングのタイミングや強さに直したい点がある場合にそれらを可視化して問題を明確に認識させ修正できるようにするという試みを行うことがある。記録したMIDIデータは、通常はその場で見せるに留めているが、必要に応じデータを渡して自宅のPCなどでも見ることも可能である。</p>
2. 武庫川女子大学音楽学部「演習」（3年ゼミ）	2018年04月から現在	<p>教員から話題提供をする場合には、必要に応じスライドを利用し、そのハンドアウトなどを配布している。また、コミュニケーションを活発にし、必要な情報を効率的に提供・共有できるようにするために、オンラインツールSlackを使用し、ゼミの仮想スペースを作成している。ここには、教員からの情報提供や連絡事項などを載せるチャンネルのほか、学生が作成したスライド資料、見つけた論文などの共有ができる各学生の個人チャンネル、1週間の進捗を報告するためチャンネル、興味に応じて読んでほしい記事や、学会・研究会情報などを流すチャンネルなどを作成し、多方向にやりとりができるようになっている。</p>
3. 武庫川女子大学音楽学部「ソルフェージュ1A, 1B」	2018年04月から現在	<p>聴音や視唱などの課題をおこなう際、どのような課題でどこがうまくできたか、正答できなかった箇所やうまくできなかった箇所はどのような箇所か、その理由は何か、といったことを、課題ごとに振り返るシートを作成し利用している。これを記入させることで、各自の学習状況への理解や意識を高め、また教員が各学生の課題を把握してコメントし、今後意識したいポイントや練習してほしい内容、よくできた点についてのポジティブ・フィードバックなどを返すことができるため、学習の効率化と意欲向上につながっていると考えている。</p>
4. 武庫川女子大学音楽学部「音楽心理学」	2018年4月	<p>関連する書籍や、信頼できるWebサイトの記事（ヤマハ「On-Kenスコープ」など）、論文などを紹介しつつ、それらをベースにパワーポイントなどに概要をまとめ</p>

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
2 作成した教科書、教材		
5. 武庫川女子大学音楽学部「音楽科指導法I-IV」	2017年04月から現在	たものを授業時に使用している。スライド上、重要な用語などの部分に白抜きのボックスをあてておき、それをハンドアウトとして印刷したものを配布資料として利用した。この資料では単に穴埋めさせるのではなく、表示する前にその語が何であるか考えさせたり、表示後にもその意味するところは何かを考えさせたりしながら授業を進めた。また、授業の内容に応じ音源や動画などを埋め込み、効率的に視聴覚教材にアクセスできるようにしている。
6. 武庫川女子大学音楽専攻科「楽書購読」	2016年04月2016年09月、 2018年04月～現在	音楽科教育に関する基礎的な概念や、学習指導要領に基づいた指導案・指導計画作成方法を理解するためのプリントやワークシート、世界各地の特徴的な音楽や日本音楽を俯瞰するための資料を作成した。世界の民族の音楽を扱った際には、地図と各種音楽の動画がリンクするような形でオンライン資料を作成し、調べてみたい地域の音楽に容易にアクセスできるようにした。また、2017年度後期の2講座以降、Google Classroom を用いて、より円滑に学生とやりとりをしたり、教員作成の資料、学生作成の資料をともに共有できるようにした。
7. 大阪音楽大学「ピアノ指導法」	2016年04月-現在、前期のみ	音楽に関する文章を書いたり、関連する文献を探し出しリストアップする際に利用するためのワークシート、楽器演奏のメカニズムに関するレクチャーの際に利用したPowerPointスライドなどを作成の上使用した。また、Google Classroom を使用して、受講生が作成した資料の共有だけでなく、各授業の概要をまとめて「投稿」の形で共有し、翌週への準備に利用できるようにしている。
8. 武庫川女子大学音楽学部「音楽教育学研究」	2016年04月-現在	発達心理学の講義内容のPowerPointスライドと、それを印刷したハンドアウトの形のプリント資料を使用している。重要な語句や注意を促したい部分を枠のある白い長方形で覆った上で長方形が消えるアニメーションを設定しておくことで、スライドでは各語句を一つずつ提示しながら、穴埋めのワークシートとして利用できる。また、音楽や演奏に必要な知覚や運動の諸能力の発達については、2012年～2013年にかけてそれら能力の発達に関する先行研究調査をおこなった際に収集した情報をもとに、聴覚・脳・運動の発達に関するオリジナル資料を作成し使用した。
9. 流通科学大学サービス産業学部「エンタテインメント演習」・「レクリエーション演習」	2011年04月～2014年07月（エンタテインメント演習：前期のみ、レクリエーション演習：2012年度後期のみ）	音楽教育学の諸領域や、研究方法、研究倫理について理解するためのワークシートや、文献調査の際に、記録すべき書誌情報とその形式を理解するための文献管理用Excelシートなどを作成して配布した。ただし、文献管理方法にはソフトやインターネット上のサービスを利用した効果的な方法もあるため、各自の状況や好みに応じて、どれを使うかを自身で選ぶよう勧めている。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 長野県阿智高等学校「地域文化」カリキュラム開発および実践	2005年04月01日～2006年03月20日	同校の「人間環境コース」の生徒を対象とした「地域文化」の授業で、無形文化の領域を担当した。長野県下伊那地区の伝統芸能、行事を中心に、調べ学習をベースとして地域の文化をより幅広く知ること、考察を深めることを主眼に授業を展開した。生徒たちに、下伊那地区を中心に伊那谷の伝統芸能の豊かさや奥深

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
2. 高等学校における「ミニコンサート」の企画・開催	2004年12月01日～2006年03月20日	さに触れ、自分たちの住む地域の文化をよく知り親しむと同時に、文化の担い手にもなっていくことについて、考えさせることができた。 長野県飯田高等学校および阿智高等学校において、趣味、部活動、授業等での生徒たちの音楽活動を発表する機会を設け、学校の音楽文化をより活性化するために、定期的に校内ミニコンサートを開催した。参加を希望する生徒であれば、演奏形態やジャンルを問わず参加可能で、昼休みを利用し正面玄関ホールまたは音楽室で行った。飯田高等学校での取り組みは南信州新聞や同窓会報にも取り上げられた。
3. 高等学校における音楽科の授業実践	2004年04月01日～2006年03月20日	長野県飯田高等学校、阿智高等学校「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」の授業実践。歌唱、器楽、鑑賞等を含み、高等学校普通科の音楽の教科内容を全般的に取り扱った。主な実践に、歌唱領域での歌詞とメロディの関係に注目させる授業、器楽領域におけるギターとリコーダーを中心とするアンサンブルの授業、ボディパーカッション、音楽史の概観、世界の民族音楽の鑑賞、薩摩琵琶奏者を招いての生演奏の鑑賞等の実践がある。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 司書教諭	2004年12月1日	司書教諭講習修了証：文部科学省発行
2. 高等学校教諭専修免許状（音楽）	2004年3月31日	高等学校教諭専修免許状（音楽）長野県教育委員会発行
3. 中学校教諭専修免許状（音楽）	2004年3月31日	中学校教諭専修免許状（音楽）長野県教育委員会発行
4. 小学校教諭専修免許状	2004年3月31日	小学校教諭専修免許状 長野県教育委員会発行
5. 中学校教諭二種免許状（国語）	2003年8月31日	中学校教諭二種免許状（国語）長野県教育委員会発行
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. 『音楽知覚認知ハンドブック：音楽の不思議の解明に挑む科学』	共	2020年2月	北大路書房	小川、容子、谷口、高土、中島、祥好、星野、悦子、三浦、雅展、山崎、晃男、大串、健吾、桑野、園子、難波、精一郎、大澤、智恵、他（担当：分担執筆、範囲：2. 演奏技能の発達と獲得（第9章 音楽の演奏/ 3節 演奏のモデル）総ページ数（p.235）/3. 演奏情報の認知と記憶（第9章 音楽の演奏/ 4 節 演奏者の心理と障害）（pp.243-244））（ISBN：9784762830990）
2. 『音楽科教育法：中学校・高等学校教員養成課程』	共	2019年11月	教育芸術社	齊藤 忠彦、菅 裕、大澤 智恵、他 担当区分 分担執筆 担当範囲 第2章 教材分析と展開例〔器楽〕威風堂々（リコーダー）（pp.104-105）、第4章 理解を深める 知っておきたい教育用語（pp.212-213）総ページ数 253p ISBN 9784877888459 CiNii Books http://ci.nii.ac.jp/ncid/BB29304722
3. 『音楽教育研究ハンドブック』	共	2019年10月	音楽之友社	日本音楽教育学会 担当区分 分担執筆 担当範囲 「質的情報と量的情報をとともに扱うこと」（第2部 音楽教育研究の方法/ 1章 音楽教育研究の計画の立て方/ 2 データと向き合う）総ページ数 247p 担当ページ 記述言語 日本語 ISBN 9784276311404

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
4. 『初等音楽科教育』	共	2018年03月31日	ミネルヴァ書房	CiNii Books http://ci.nii.ac.jp/ncid/BB28910909 原清治、春日井敏之、篠原正典、森田真樹（監修）、白井奈穂、*高見仁志、菅 裕、山本千紗、大澤智恵（執筆） 本人担当箇所：第11章（簡易伴奏の運指、楽譜全体の校閲） 本書は平成29年度版の学習指導要領に準拠し、幼保小連携、教科の専門性と指導法の融合、教師の困難克服と成長の3点を柱にしながら執筆された初等音楽科教育の教職講座の教科書で、大澤は共通教材の簡易伴奏（菅裕編曲）の運指のチェック及び修正、運指やコードネームに関する付記、楽譜全体のチェック及び校閲をおこなった。
5. 『新しい小学校音楽科の教科書をつくる』	共	2018年03月31日	ミネルヴァ書房	高見仁志（編著）／高見仁志、津田正之、城佳代、大澤智恵、白井奈緒、森薫、門脇早穂子、齊藤忠彦、田中健次、仙北瑞穂、松永洋介、西沢久実、岡田知也、菅裕、山本知沙（著） 担当章：大澤 第3章「器楽」1-5（pp.29-39）、菅・大澤 第17章「共通教材と伴奏譜」（pp.163-215、大澤の担当は運指校閲および楽譜校正） 平成29年版学習指導要領に基づいて執筆された小学校音楽教育法に関する書籍。第3章「器楽」では、「器楽活動の意義」、「学習指導要領にみる器楽」、「小学校で演奏される楽器たち」、「器楽の教材」、「各楽器の指導に際して」の5項目を執筆した。また第17章では、簡易伴奏（菅裕編曲）の運指を検討し提案したほか、楽譜のチェックをおこなった。
2 学位論文				
1. 博士学位論文「ピアノで意図した音高を実現する技能：キー位置記憶の形成と、聴覚記憶との統合」	単	2014年03月	東京学芸大学大学院 連合学校教育学研究科 博士学位論文	主査：小川昌文教授 意図した音高を実現する技能としてのピアノ演奏技能メカニズムについて述べた。序論で本テーマの社会的・教育的・科学的位置づけについて論じ、第1部では音高記憶の形成について聴覚的表象の形成が演奏の遂行に果たす役割について論じ、第2部では空間的記憶とその系列の形成について、第3部では聴覚的記憶と視覚運動的記憶の結びつきが果たす役割について述べ、総論ではこれらを総括したのち、実際の指導や学習の改善への本研究からの示唆を述べた。
2. 修士学位論文「音のチャンク獲得過程としてのピアノ学習」	単	2004年02月	信州大学大学院 教育学研究科（修士課程）学位論文	主査：新谷勝造教授 ピアノ学習において獲得される音のチャンクの内容と獲得過程を検討するため、ピアノ学習経験の度合いの異なる被験者が音列を短時間に記憶するという実験および、楽曲の練習過程の観察を行なった。これらをもとに、ピアノ学習は、学習者のもつチャンクの内容や大きさの多様化によって成立していることを指摘した。
3 学術論文				
1. Neural Advantages of Older Musicians Involve the Cerebellum: Implications for Healthy Aging Through Lifelong Musical Instrument Training. (査読付)	共	2022年1月5日	Frontiers in human neuroscience, 15.	Yamashita, M., <u>Ohsawa, C.</u> , Suzuki, M., Guo, X., Sadakata, M., Otsuka, Y., Asano, K., Abe, N., & Sekiyama, K. (2021). Neural Advantages of Older Musicians Involve the Cerebellum: Implications for Healthy Aging Through Lifelong Musical Instrument Training. <i>Frontiers in human neuroscience</i> , 15.
2. Musical instrument training program improves verbal memory and neural efficiency in novice older adults. (査読付)	共	2020年12月8日	Human brain mapping, 42(5), 1359-1375.	Guo, X., Yamashita, M., Suzuki, M., <u>Ohsawa, C.</u> , Asano, K., Abe, N., Soshi, T., & Sekiyama, K. (2021). Musical instrument training program improves verbal memory and neural efficiency in novice older adults. <i>Human brain mapping</i> , 42(5), 1359-1375.
3. 音楽に関する実践知研究の展望：「即時の知」と「信念・価値観としての知」に着目して (査読付)	共	2018年3月	音楽学習研究, 13, pp.69-78.	高見仁志、森薫、大澤智恵、仙北瑞帆、菅裕 担当箇所 第2節第5項 (p.74, 1.81- p.75 1.68) および 英文アブストラクト。また、全体の論旨に関する議論に参画した。 音楽に関する様々な活動に生起する実践知を探究する上で、得られた成果と方法論上の課題を明確にし、それらを横断的に検討するこ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
4. 音楽に関する実践知研究：可能性と課題	共	2018年03月	宮崎大学教育学部 紀要 芸術・保健体育・家政・技術, 90, 37-48	とによって、これからの音楽教育研究の可能性を拓げることを目的とし、実践知を2層から構成されるものとしてとらえ、各層を「即時の知」と「信念・価値観としての知」として位置づけた上で、音楽に関する実践知研究5事例から、実践者と環境自体の変容に焦点を当て、両者の関係性から更新される実践知全体像の視座から考察を試みた。大澤の担当箇所では、キー位置記憶実験を紹介しながら、量的研究と質的研究を統合し実践に関する知をとらえることの必要性について述べている。 高見仁志、森薫、大澤智恵、仙北瑞帆、菅裕 担当箇所：p41-42(2.2)、その他全体の論旨について著者5名で議論した。
5. Improved digit span in children after a 6-week intervention of playing a musical instrument: an exploratory randomized controlled trial. (査読付)	共	2018年1月	Frontiers in psychology, 8, 2303.	音楽に関する様々な活動を取りあげ、底に生起する実践知を探求する上で、期待される聖歌と方法論状の課題を明確にし、それらを横断的に検討することによって、これからの音楽教育研究の可能性を拓げることを目的としている。まず、知に関する先行研究を概観しながら、実践知の構造と特徴を整理した。これを踏まえた上で、音楽に関する実践知研究5事例を示し、(1)実践者の暗黙知の抽出、(2)実践共同体における対話的知の解明、(3)指導・学習場面への応用可能性の検討、の視座から考察を試みた。 Guo, X., Ohsawa, C., Suzuki, A., & Sekiyama, K. 大澤は鍵盤ハーモニカのトレーニングのプログラム開発・実施を中心に貢献したが、著者全員が全面的に議論や実施に関わっているため、担当箇所は抽出不可能。
6. ピアノ演奏中に得られる視覚・聴覚・触覚情報の打鍵位置決定における役割：スケール及びアルペジオ課題を用いて	共	2017年6月	研究報告音楽情報科学 (MUS), 2017-MUS-115 (53), pp.1-3	学校外での音楽経験のない6歳から8歳の児童を対象に、6週間(12セッション)の鍵盤ハーモニカのレッスンによる音楽トレーニングをおこなった実験群と、その間を休み時間として過ごした統制群にランダムに振り分け、音楽レッスンが認知機能の発達に与える効果をトレーニング期間の前後に測定したところ、作業記憶のうち数唱テストの成績に音楽トレーニングによる向上がみられた。 大澤智恵, 澤井賢一, 津崎実 ピアノ演奏の遂行中に演奏者が入手できる知覚情報のうち、視覚、聴覚、触覚情報の打鍵位置決定における役割を検討した。実験条件として鍵盤と手からの視覚情報と演奏音の有無を操作し、自身のレパートリーの中からの抜粋、順次進行のみからなるスケールと様々な音程を含むアルペジオ音形を演奏するよう実験参加者に依頼した。スケールとアルペジオの課題では、得られる触覚情報の異なる2つの調のものを設けた。これらの演奏におけるエラーの分析結果から、各種知覚情報が果たす役割や、それらがどのような場面で特に有用な情報をもたらしているかを検討した。
7. Memory of the piano key positions in pianists. (国際会議論文, 査読付)	共	2013年08月	Williamon, A. & Goebel, W. (ed.), Proceedings of the international symposium on performance science 2013 (pp. 67-72).	Ohsawa, C., Obata, S., Hirano, T., Tsuzaki, M., Ito, T., Saito, T., & Kinoshita, H. 実験計画から執筆に至るまで、共著者ら全員との議論をともなうて、大澤が主導的におこなったため、担当箇所抽出不可能。 キー位置指示にみるピアノ演奏者のキー位置記憶は、経験によりある程度正確化していたことから、キー位置記憶は不正確ながらも学習されていることがわかった。指示位置は参照キーから遠く離れるほどエラーの大きさを増しており、左手より右手で、左側より右側の空間で、正確性が高かった。
8. Accuracy of reaching a target key by trained pianists. (国際会議予稿集論文, 査読付)	共	2012年07月	Cambouropoulos, E., Tsougras, C., Mavromatis, P. & Pastiadis, K. (ed.), Proceedings of the 12th international conference on music perception and cognition	Ohsawa, C., Hirano, T., Obata, S., Ito, T. & Kinoshita, H. 実験計画から執筆に至るまで、共著者ら全員との議論をともなうて、大澤が主導的におこなったため、担当箇所抽出不可能。ピアノ演奏者の鍵盤位置記憶の正確性を、鍵盤面を想定した机上での鍵盤位置タップ課題により測定した。鍵盤からの視覚・触覚情報が利用できない条件でのタップ位置は曖昧で、ピアノ演奏者は外部から知覚する情報をもとに鍵盤位置を知り得ていることが推測された。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
9.Connection between auditory and visumotor representations of piano performance in relation to practice. (国際会議予稿集論文, 査読付)	共	2010年08月	and the 8th triennial conference of European society for the cognitive sciences of music (pp. 744-745). Demorest, S. M., Morrison, S. J. & Campbell, P. S. (ed.), Proceedings of the 11th international conference on music perception and cognition (pp. 581-582).	Ohisawa, C., Oura, Y., Miyazaki, K. & Kinoshita, H. 実験計画から執筆に至るまで、共著者ら全員との議論をともなうて、大澤が主導的におこなったため、担当箇所抽出不可能。音楽専攻の大学生が新奇な楽曲を練習し演奏学習する過程において、その楽曲の演奏に関する聴覚的記憶表象と視覚運動的記憶表象との結びつきの形成過程を観察し、その役割を検討した。結びつきの強さは、抽出した音列の弾くべきキー位置とその音を同時に提示し、不一致箇所を検出する課題で測られた。演奏の正確性と2表象間の結びつきの強さには中程度の相関があったことから、こうした結びつきは演奏の実現に対しある程度貢献していることが示唆された。
10.The effect of singing the melody in the practice of the piano. (国際会議予稿集論文, 査読付)	単	2009年08月	Louhivuori, J., Eerola, T., Himberg, T. & Eerola, P. S. (ed.), Proceedings of the 7th triennial conference of European society for the cognitive sciences of music (pp. 387-390).	ピアノの学習における聴覚的な表象の役割を検討するため、聴覚的な表象を強化する条件として弾こうとするメロディを歌いながら練習する条件を設け、歌うことなしに練習する条件との学習の効果を比較した。結果、学習者の自己評価、第三者による主観評価、演奏のエラー分析の結果、歌うことになじみの強い学習者は、歌いながらの練習でより高い学習効果を見せており、こうした学習者においては歌うことにより強化された聴覚的表象が、演奏の学習や演奏そのものに役立っていた可能性が示唆された。
11. 鍵盤楽器演奏技能の習得: visuomotor 系列学習の側面から.	単	2007年03月	現代社会文化研究, 38, 101-113.	鍵盤楽器演奏の学習における演奏技能の習得について考察するため、視覚運動(visuomotor)系列の学習を扱った研究を紹介し、問題を整理した。鍵盤楽器演奏は、他の視覚運動系列の遂行と同様に組織性をもち、視覚的あるいは空間的な表象と身体に特化した運動表象の両方を持っていると考えられる。一方で、視覚運動的側面に注目して鍵盤楽器演奏やその技能の習得・学習を考える際には、演奏が音を実現させるための行為であることや、鍵盤という操作盤の特殊性にも注意を払う必要があると述べた。
12. 中学校音楽科における歌唱教材の扱いに関する実態調査	共	2005年12月	信州大学教育学部紀要, 116, 71-80.	齊藤忠彦, 大澤智恵 本人担当部分: II. 調査結果 1-5 (該当ページはpp.71-77)。 中学校音楽科において扱われている歌唱教材の傾向を探るため、全国から無作為に選んだ中学校300校を対象にアンケート調査を行なった。上位10曲に上がった楽曲の曲の拍子、テンポ、長さ、編成、歌詞の内容等の観点から分析した結果、中学校での歌唱教材には、自然に関する歌詞を多く含み、拍子は4/4拍子が多く、調性は10曲すべてが長音階であるなど一定の志向性があること、音楽教師は現在の歌唱教材に満足していない人が多いこと、彼らが求めている歌唱教材の具体的な内容がどのようなものであるか等が明らかになった。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1.Contribution of visual and	共	2018年07月	The 15th International	Ohisawa, C., Sawai, K., & Tsuzaki, M. 口頭発表、国際会議

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
auditory information in pianists' performance of their repertoire: observation with positional and moving error analyses.			Conf. of Music Perception and Cognition: the 10th Triennial Conf. of European Society, University of New South Wales, Sydney	ピアニストが演奏中にどのようなモダリティの知覚情報を利用しているかを調査した実験について報告した。今回の実験データは実験参加者のレパートリーのうち、技術的に難しいが聴かせどころでもあると感じている箇所を抜粋してもらい、その部分を、視覚情報および聴覚情報のある条件とない条件の組み合わせの4条件下で演奏するよう依頼したものであった。スケールやアルペジオなどの実験用音列と同様の傾向がみられたが、特に個人差（あるいは楽曲差）が大きく、特に抜き出してよく練習している箇所では、演奏中の各種モダリティ情報の利用方略が人によって、あるいは音型によって異なることが示唆された。
2. 弾きたい音（鍵）を弾くために、視覚と聴覚は重要か：視聴覚情報を除去したピアノ演奏のエラー分析から	共	2017年10月21日	日本音楽教育学会第48回大会、愛知教育大学	大澤智恵, 澤井賢一 口頭発表 演奏中の視覚、聴覚情報の役割を検討した実験結果を示し、それに基づいて、弾きたい音を弾くための視聴覚情報の役割モデルを提案した。
3. Visual, auditory, and haptic information in the performance of scale and arpeggio tasks in pianists.	共	2017年09月02日	The International Symposium on Performance Science 2017, Reykjavik (Iceland)	Ohsawa, C., Sawai, K., and Tsuzaki, M. 口頭発表, 国際会議 演奏中に得られる視覚情報・聴覚情報と、白鍵と黒鍵の段差から得られる触覚情報の役割を検討した実験の結果を報告した。また、演奏エラーの解析の仕方として、単なるミスタッチのカウントだけでなく、前の音からの移動距離によるエラーカウントから得た演奏正確性データから。視覚情報は、ミスを起こさせないという点で大きく貢献しており、聴覚・触覚情報は、起きてしまったミスを少ない手数で修正するのに役立っていた。
4. The role of real-time acquisition of visual and auditory information in the performance of scale and arpeggio tasks in pianists	共	2016年12月01日	5th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan, Honolulu	Ohsawa, C., Sawai, K., and Tsuzaki, M. 口頭発表, 国際会議 ピアノ演奏における、正しいキー位置への運指におけるリアルタイム知覚情報の貢献を検討するために行なった実験の一部を報告した。役割を検討した知覚情報は視覚情報と聴覚情報で、スケールおよび5種類のアルペジオ演奏において各情報の有無を操作した4条件で実験をおこなった。アルペジオの演奏において視覚情報がより大きな役割を果たしていたが、聴覚情報も部分的に貢献していることを示した。
5. ピアノ演奏の打鍵位置制御における視覚と聴覚の役割：前後の音程とテンポとの関連から	共	2015年12月13日	第18回日本音響学会関西支部若手研究者交流研究発表会、関西大学	大澤智恵, 澤井賢一, 津崎実 ポスター発表 視覚情報、聴覚情報、また触覚情報が、演奏成立に果たす役割を、楽曲ではなくスケールやアルペジオを演奏した予備実験の結果を事例として報告した。ここでは、視覚情報の重要性が改めて確認された他、テンポ、触覚情報量（黒鍵の利用の有無）による演奏の正確性の傾向から、仮説を設定し、以後優先的に検討すべき事項に関して議論した。
6. Spatial accuracy in piano performance with and without auditory and visual information.	共	2015年09月04日	The international symposium on performance science 2015, Ryukoku university, Kyoto	Ohsawa, C., Sawai, K. & Tsuzaki, M. 口頭発表, 国際会議 ピアノ演奏における打鍵位置制御に寄与している可能性のある知覚情報のうち、視覚情報と聴覚情報の有無を操作される条件で、アマチュアピアノ演奏者が楽曲の抜粋を演奏した。演奏のMIDIデータを分析したところ、視覚聴覚なし条件では、大きなミスタッチがみられたが、一旦ずれが生じるとそのずれを保ち平行に引き続ける傾向がみられた。視覚なし条件では、ミス出現後に正しい位置に戻ろうとする傾向がみられ、ミスのサイズは視覚聴覚なし条件よりも小さかった。このことから、事前に正しいキー位置を知る上で、跳躍のサイズに依存し視覚情報は決定的な貢献をしており、聴覚情報はフィードバック情報として補助的にはたらくことが示唆された。
7. ピアノ演奏の打鍵位置制御における聴覚・視覚情報遮蔽の影響	共	2014年12月14日	第17回日本音響学会関西支部 若手研究者交流研究発表会、関西大学	大澤智恵, 津崎実, 木下博 ポスター発表 ピアノ演奏において、適切な位置への運指を可能にするためには、キー位置の空間的な記憶だけでは情報が足りないと考えられる。そ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
8. 鍵盤操作の道具利用ネットワークとしての特殊性：キー位置指示課題にみる可動な空間的記憶	共	2014年10月25日	日本音楽教育学会第45回大会、聖心女子大学	<p>こで、演奏中にリアルタイムで得られる知覚情報のうち、視覚と聴覚がどのように寄与しているかを調査するために、ピアノ演奏熟達者により、1) 通常演奏 2) 視覚なし演奏 3) 音フィードバックなし演奏 4) 視覚・音ともなし演奏 の4条件の演奏がどのように遂行されるかを調査した。結果から視覚情報の貢献度が高いことが示唆された。</p> <p>大澤智恵, 木下博 口頭発表 キー位置指示実験の結果全体を総括し、キー位置記憶は参照キーからの相対的位置に依存していることから、ピアノ鍵盤は、一般的な道具利用のネットワークとは異なり、88鍵全体ではなく、その一部より狭い範囲が、いわば可動なツール領域のような形で記憶されて利用され、さらに体性感覚記憶や、リアルタイム知覚を用いて、操作が可能となっていることが示唆された。こうした鍵盤の利用方略は、他の道具利用とは異なった、ピアノ特異的なものであると考えられると述べた。</p>
9. Flexible modulation in spatial representation of the piano keyboard in trained pianists.	共	2014年08月07日	International conference for music perception and cognition and 5th conference of Asia-Pacific society for the cognitive sciences of music -Joint conference (ICMPC-APSCOM2014), Yonsei University, Seoul	<p>Ohsawa, C., Obata, S., Hirano, T., Tsuzaki, M. & Kinoshita, H. ポスター発表, 国際会議 正確性分布と左右差の検討に加え、参照とするキーをいわゆる中央のド, C4に置いた条件と、その3オクターブ上のC7に置いた条件を設け、それらの正確性分布を比較した。どちらに参照点があっても、その参照からの相対的な位置と距離によって正確性がきまるような分布がみられ、相対的な位置と距離が同じであればどちらの参照点に対してもターゲットキー指示位置はほぼ等しかった。このことから、鍵盤の空間的記憶は演奏者の身体や鍵盤面全体に対してではなく、外部参照点を中心に規定される可動なものであることが示された。</p>
10. ピアノ鍵盤の空間的記憶の正確性分布における左右差と学習効果	共	2014年05月25日	日本音楽知覚認知学会平成26年度春季研究発表会、愛知県立大学	<p>大澤智恵, 津崎実, 木下博 口頭発表, 【研究選奨受賞】 正確性分布と左右差の検討に加え、参照とするキーをいわゆる中央のド, C4に置いた条件と、その3オクターブ上のC7に置いた条件を設け、それらの正確性分布を比較した。どちらに参照点があっても、その参照からの相対的な位置と距離によって正確性がきまるような分布がみられ、相対的な位置と距離が同じであればどちらの参照点に対してもターゲットキー指示位置はほぼ等しかった。このことから、鍵盤の空間的記憶は演奏者の身体や鍵盤面全体に対してではなく、外部参照点を中心に規定される可動なものであることが示された。</p>
11. 記憶されたピアノ鍵盤の大きさや形：熟達者と非熟達者の鍵盤位置指示課題実験から	共	2013年10月13日	日本音楽教育学会第44回大会、弘前大学	<p>大澤智恵, 木下博, 齊藤忠彦 口頭発表 ピアノ演奏者が記憶している鍵盤の「大きさや形」についての考察と推論を述べた。キー位置指示課題における指示位置のずれは、参照キーのあった鍵盤の中央付近からみてより遠くにあったことから、実際の鍵盤よりも大きなサイズの鍵盤が空間的に記憶、あるいはイメージされているだろうことを示唆した。</p>
12. Memory of the piano key positions in pianists	共	2013年08月23日	The international symposium on performance science 2013, University of music and performing arts,	<p>Ohsawa, C., Obata, S., Hirano, T., Tsuzaki, M., Ito T., Tadahiko Saito & Kinoshita, H. 口頭発表, 国際会議 実験は共著者との議論を経て、大澤が主導して計画実施、分析をおこない、筆頭発表者として主に木下とともに発表にあたった。ピアノ演奏において、鍵盤の位置がどのようにしてピアノ奏者に知られているかを明らかにするため、ピアノ演奏者の鍵盤位置知覚の正確性を、鍵盤面を想定した机上での鍵盤位置タップ課題により測定し</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
13. Accuracy of reaching a target key by trained pianists.	共	2012年07月24日	Vienna Conference on music perception and cognition and 8th triennial conference of the European society for the cognitive sciences of music (ICMPC12-ESCOM2012), Porto palace hotel and conference center, Thessaloniki	た。鍵盤からの視覚・触覚情報が利用できない条件でのタップ位置は曖昧で、ピアノ演奏者は外部から知覚する情報をもとに鍵盤位置を知り得ていることが示された。また、参照点であるC4からのインターバルが大きいほど正確性は低く、右手は左手より比較的正确であった。 Ohsawa, C., Hirano, T., Obata, S., Ito, T & Kinoshita, H. ポスター発表、国際会議
14. ピアニストのキー位置指示課題遂行にみる。鍵盤の空間的記憶の特性	共	2012年06月17日～18日	第21回運動学習研究会、大阪大学	大澤智恵, 伊東太郎, 門田浩二, 木下博 ポスター発表 ピアノ演奏において、鍵盤の位置がどのようにしてピアノ奏者に知られているかを明らかにするため、ピアノ演奏者の鍵盤位置知覚の正確性を、鍵盤面を想定した机上での鍵盤位置タップ課題により測定した。鍵盤からの視覚・触覚情報が利用できない条件でのタップ位置は曖昧で、ピアノ演奏者は外部から知覚する情報をもとに鍵盤位置を知り得ていることが示された。また、参照点であるC4からのインターバルが大きいほど正確性は低く、右手は左手より比較的正确であった。
15. ピアニストにおける鍵盤位置タップ課題：空間的精度の分布と手の左右差	共	2011年12月18日	日本音響学会関西支部 第14回関西支部若手研究者交流研究発表会、産業技術総合研究所関西センター	大澤智恵, 伊東太郎, 木下博 ポスター発表、【若手奨励賞受賞】 ピアノ演奏において、鍵盤の位置はどのようにしてピアノ奏者に知られているかを明らかにするため、ピアノ演奏者の鍵盤位置知覚の正確性を、鍵盤面を想定した机上での鍵盤位置タップ課題により測定した。鍵盤からの視覚・触覚情報が利用できない条件でのタップ位置は曖昧で、参照点であるC4からのインターバルが大きいほど正確性は低く、右手は左手より比較的正确であった。
16. 楽曲の記憶表象の変化にみるピアノ演奏学習の一側面：演奏の正確性における異種モダリティ表象の結びつきの貢献から	共	2011年03月12日	日本音楽教育学会 第28回北陸地区例会、金沢大学	大澤智恵, 木下博 口頭発表 演奏の学習において、楽曲の演奏についてのモダリティの異なる記憶表象間の結びつきが獲得される過程と、それが演奏の遂行において果たす役割を調査した一連の研究結果の総括報告。2010年8月の国際学会発表内容を踏まえ、学習における複数モダリティの表象の結びつきの役割に関する考察を述べた。
17. Connection between auditory and visuomotor representations of piano performance in relation to practice.	共	2010年08月23日	11th International conference on music perception and cognition (ICMPC11), University of Washington, Seattle	Ohsawa, C., Oura, Y., Miyazaki, K. & Kinoshita, H. ポスター発表、国際会議 音楽専攻の大学生が新奇な楽曲を練習する過程において、その楽曲の演奏に関する聴覚的記憶表象と視覚運動的記憶表象との結びつきの強さを測るための課題を学習者に課した。演奏の正確性と課題の正答率には中程度の相関があったことから、こうした結びつきは演奏の正確性に対し決定的でないもののある程度の貢献をしていることが示唆された。反応時間データも併せて検討し、無効と判断した方がより適切に判断課題の遂行を見られると考えるデータを取り除いた結果、学習の後期にもわずかながら成績は向上していた。
18. ピアノ練習過程における演奏の聴覚的表	単	2009年12月	日本音響学会関西支部 第12回関西支	ピアノ演奏の練習過程における、楽曲の聴覚的表象と視覚運動的表象の対応関係の強さがどのように変化するかを解析した結果を報告

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
象と視覚運動的表象の結びつきの変化			部若手研究者交流研究発表会、 関西大学	した。練習の進行とともにこうした結びつきは一度強まりを見せたもののその後弱まっており、演奏の正確性との相関は小さいものであった。本発表時点では、結びつきの変化のプロセスがこのような形でみられたことについて、適切な解釈を模索している最中であったため、他の学会参加者と活発に議論することができ、この後の解析方法の改善につなげることができた。
19. ピアノ練習過程における演奏の聴覚的表象と運動的表象の結びつきの変化	単	2009年10月03日	日本音楽教育学会第40回大会、広島大学	口頭発表 ピアノ演奏の学習において形成される記憶表象のうち、聴覚的表象と視覚的に捉えた運動的表象の結びつきの強さや正確さが学習において果たす役割を検討するためにおこなった実験を報告した。音楽専攻の大学生が新奇な楽曲を練習し演奏学習する過程において、その楽曲の演奏に関する聴覚的記憶表象と視覚運動的記憶表象との結びつきの形成過程を観察し、その役割を検討した。結びつきの強さは、抽出した音列の弾くべきキー位置とその音を同時に提示し、不一致箇所を検出する課題で測られた。得られた結果から、学習の初期には結びつきは一旦強まるものの、段階が進むとそれは弱まるものが推測された？。
20. The effect of singing the melody in the practice of the piano.	単	2009年08月14日	The 7th triennial conference of European society for the cognitive sciences of music (ESCOM2009), University of Jyvaskyla. Jyvaskyla	ポスター発表、国際会議 論文“The effect of singing the melody in the practice of the piano”のポスター発表。ピアノの学習における聴覚的な表象の役割を検討するため、聴覚的な表象を強化する条件として弾こうとするメロディを歌いながら練習する条件を設け、歌うことなしに練習する条件との学習の効果を比較した。結果、学習者の自己評価、第三者による主観評価、演奏のエラー分析の結果、歌うことになじみの強い学習者は、歌いながらの練習でより高い学習効果を見せており、こうした学習者においては歌うことにより強化された聴覚的表象が、演奏の学習や演奏そのものに役立っていた可能性が示唆された。
21. 音楽的音高の発声反応と音名反応	共	2008年05月25日	日本音楽知覚認知学会 2008年春季研究発表会、上野学園大学	大澤智恵、大浦容子、宮崎謙一 絶対音感や相対音感は聴いた音の音高を音名で言語的に言い当てる能力と、音名によって指定された音高の聴覚的なイメージを作り出す能力の2面から定義されている。この2種の能力は同じ基礎的能力によって発揮されているか否かを探索するために実施した実験研究を報告した。
22. ピアノ学習において聴覚的表象および運動的表象の形成が果たす役割：各学習者における旋律練習時の歌唱の効果と『歌唱へのなじみ』との関連から	単	2008年03月16日	日本音楽教育学会第25回北陸地区例会、長野市生涯学習センター	口頭発表 聴覚運動統合の観点による演奏研究を概観し、ピアノ学習における練習時の歌唱の効果の実験の結果をふまえ、学習者の歌唱へのなじみと、表象形成との関連についての考察をおこなった。メンタルプラクティスの先行研究において、イメージ能力には個人差があることが指摘されており、また、メロディ記憶課題を用いた研究でも視覚的な学習が効果的な人と聴覚的な学習が効果的な人がいることが示されている。これら先行研究の知見と、練習時の歌唱の効果における歌唱へのなじみによる結果の個人差を照合し、学習者によって意図的に強化すべき演奏のイメージのモダリティには差異があるだろうことを指摘した？。
23. ピアノ学習における練習時の歌唱の効果	単	2007年11月10日	日本音楽教育学会第38回全国大会、岐阜大学	口頭発表 ピアノの学習における聴覚的な表象の役割を検討するため、聴覚的な表象を強化する条件として弾こうとするメロディを歌いながら練習する条件を設け、歌うことなしに練習する条件との学習の効果を比較した。結果、学習者の自己評価、第三者による主観評価、演奏のエラー分析の結果、歌うことになじみの強い学習者は、歌いながらの練習でより高い学習効果を見せており、こうした学習者においては歌うことにより強化された聴覚的表象が、演奏の学習や演奏そのものに役立っていた可能性が示唆された？。
24. 音のチャンク獲得過程としてのピアノ学習	単	2004年2月21日	日本音楽教育学会第19回地区例会、富山市民芸術創造センター	口頭発表 ピアノ学習において音のチャンクの獲得過程を検討するためにおこなった楽曲の練習過程観察の結果を中心に、修士学位論文の成果を報告した。楽曲練習過程は、10日間の練習内容の分析であった。一

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
25. ピアノ学習経験がもたらす音のチャンク：楽譜で呈示された音列の記憶と再生から	単	2003年10月18日	日本音楽教育学会第34回全国大会、神戸大学	度に続けて弾く楽曲の一部をセグメントと呼び、セグメントのサイズ、セグメントのサイズのばらつき等を分析した。結果から、ピアノ演奏学習の進行に伴いセグメント平均サイズは大きくなり、また大きさが多用となることが先行研究と同様に確認されたことから、音のチャンクのサイズや多様性も学習に伴い拡大したこと、さらにその変化にはプラトーを伴った学習曲線がみられたことから、おそらく質的転換をともなって学習が進行していることが推測された？。 口頭発表 ピアノ学習において獲得される音のチャンクの内容を検討するためにおこなった、学習経験の度合いの異なる被験者が音列を短時間に記憶するという実験による知見を報告した。ピアノ学習において獲得される音のチャンクの内容と獲得過程を検討するため、ピアノ学習経験の度合いの異なる被験者が音列を短時間に記憶するという実験をおこなった。前者の実験では、ピアノ演奏経験の多い実験参加者がより多くの音を短時間に記憶でき、それはとくに鍵盤上の白鍵と黒鍵のパターンに着目した時に規則性を見いだせる音型を演奏によって再生するときに顕著であった。このことから、ピアノ学習に音のチャンク獲得が貢献していることを指摘した？。
26. 中学校音楽科で扱われている歌唱教材の傾向と課題	共	2003年08月17日	日本学校音楽教育実践学会 第8回全国大会、国立オリンピック記念青少年総合センター	齊藤忠彦、大澤智恵 大澤は楽曲の分析とその結果部分を担当した。 中学校音楽科において扱われている歌唱教材の傾向を探るため、全国から無作為に選んだ中学校300校を対象にアンケート調査をおこなった。上位10曲に挙げた楽曲の曲の拍子、テンポ、長さ、編成、歌詞の内容等の観点から分析した結果、中学校での歌唱教材には、自然に関する歌詞を多く含み、拍子は4/4拍子が多く、調性は10曲すべてが長音階であるなど一定の志向性あること、音楽教師は現在の歌唱教材に満足していない人が多いこと、彼らが求めている歌唱教材の具体的な内容がどのようなものであるか等が明らかになった。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
1. ピアノ演奏	単	2014年7月	ひだまりVol 1 サマーコンサート、信州高遠美術館	信州大学教育学部音楽科2001年度卒業生有志で企画、出演した。 《1905年10月1日、街頭にて》(Janacek, L.)
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. パネルディスカッション「音楽に関する実践知研究(3)：「知覚」「思考」「行為」における発表および討論	共	2018年10月	日本音楽教育学会第49回岡山大会、岡山大学、岡山	大澤智恵、菅裕、*高見仁志、森薫（五十音順、*は企画・司会者） （発表者全員で論旨や発表内容の構成を考え、大澤は実験による定量的研究が実践知解明において果たす役割を論じた。） 本研究では、音楽に関する様々な活動に生起する実践知を探究する上で、得られた成果と課題を明確にし、それらを横断的に検討することによって、これからの音楽教育研究の可能性を拡げることを目的としている。最終発表となったこの回では、音楽に関する実践知を「知覚」「思考」「行為」の相互作用として捉え、認知カップリング理論を解釈し、4事例の活動に生起する実践知を認知科学の観点から考究した。
2. パネルディスカッション「音楽に関する実践知研究(2)：「即時の知」と「信念・価値観としての知」に着目して」	共	2017年10月22日	日本音楽教育学会第48回大会、愛知教育大学	大澤智恵、菅裕、仙北瑞帆、高見仁志、森薫 音楽教育学会（2016年）パネルディスカッション（2.）の内容をもとにとりまとめた報告記事。「個別具体的な状況で発揮され、更新される実践者独自の知識や思考様式、方略の総体」を「実践知（practical knowledge）」として定義し、音楽に関する様々な活動をとりあげ、音楽に関する実践知に関する課題を明確にし、音楽教育への新たな観点を提供した。
3. パネルディスカッション「音楽に関する実践知研究(1)方法論上の可能性と課題」	共	2016年10月09日	日本音楽教育学会第47回大会、横浜国立大学	高見仁志、大澤智恵、菅裕、仙北瑞帆、森薫 音楽と音楽教育に関する「実践知」に関するディスカッションをおこなった。まず、「個別具体的な状況で発揮され、更新される実践者独自の知識や思考様式、方略の総体」を「実践知（practical knowledge）」として定義し、音楽に関する様々な活動をとりあ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
4. 発表「ピアニストが演奏中に利用する知覚情報モダリティの検討：視覚・聴覚・体性感覚に関して」	単	2016年02月05日	技能情報学研究ステーション 関東音楽と脳勉強会，電気通信大学	<p>げ，そこに生起する実践知を探究する上で，期待される成果と方法論上の課題を明確にし，それらを横断的に検討することによって，従来の音楽教育に関する示唆を深めた。</p> <p>ピアニストが意図した音を打鍵するために，どのような知覚情報を用いているかに関する問題を整理した上で，視覚、聴覚情報の有無や触覚情報の量を操作した実験用音列を用いた実験の方法と、解析途上の結果の一部を報告しながら、予想される各種知覚情報の役割や演奏技能研究の可能性について議論した。特に、現在よく分かっていないのは触覚情報をはじめとする体性感覚情報の役割であり、体性感覚をあわせた知覚情報の役割と関係を示していくための今後の課題についても述べた。</p>
5. 発表「ピアノ演奏者は弾くべきキーの位置をどのように「知って」いるか：記憶とリアルタイム知覚の役割」	単	2015年01月23日	技能情報学研究ステーション 関東音楽と脳勉強会，電気通信大学	<p>鍵盤楽器演奏において，鳴らそうとする音高に対応するキーがどこにあるかを知ることが，適切な運動を遂行し演奏を成立させるうえできわめて基礎的で必須な事項であることについて述べた後，熟達度の異なるピアノ演奏者を対象としたキー位置指示実験の結果から，ピアノ演奏者のもつ鍵盤の空間的記憶の特性を報告した。また，視覚・聴覚情報フィードバックの有無を操作した演奏データから，それらの情報が演奏において果たしている役割について検討した。また，この講演の序論から派生して，「音楽そのものの研究」とは何かという議論もおこなわれた。</p>
6. 招待講演「意図した音高を実現するピアノ演奏技能メカニズムの解明に向けて」	単	2014年10月01日	特別招待講演会，九州大学大橋キャンパス	<p>意図した音高を実現する技能解明の必要性や音楽教育的，社会的立場づけについて述べたのち，ピアノ演奏を可能にする技能のモデルの大枠を紹介し，キー位置指示実験の概要と結果を紹介した。一連のキー位置指示実験研究から得られた鍵盤楽器演奏技能のメカニズムについての知見と，それら演奏の指導者や学習者に与える示唆，人のもつ道具利用の技能のメカニズム解明に寄与しうる知見などについて包括的に述べた。</p>
7. 講演「ピアノで意図した音高を実現する技能：キー位置・音高の記憶形成から」	単	2013年12月	納得研究会，立教大学	<p>博士論文のアウトラインを紹介し，またその後半の構成に沿って意図した音高を実現する技能としてのピアノ演奏技能メカニズムについて述べた。キー位置指示課題にみる鍵盤の空間的記憶の研究から，キー位置記憶は曖昧かつ学習され得るものだが，それだけを頼りに演奏は成立しないと考えられるため，リアルタイム知覚によるキー位置知覚は重要であることを述べた。またピアノ学習における演奏の視覚運動的表象と聴覚的表象の結びつきに関する実験研究から，音とキー位置系列の統合は，演奏の遂行において決定的ではないものの適切な演奏の十分条件として作用していることを示唆した。また，これらを総括したのち，実際の指導や学習の改善への本研究からの示唆を述べた。</p>
8. 研究報告「ピアニストのキー位置指示課題遂行にみる鍵盤の空間的記憶の特性」	共	2012年09月	運動学習研究会報告集，22. 96-102	<p>大澤智恵，伊東太郎，門田浩二，木下博</p> <p>実験計画から執筆に至るまで，共著者ら全員との議論をともなうことで，大澤が主導的におこなったため，担当箇所抽出不可能。</p> <p>鍵盤面に見立てた机の上で，ターゲットとするキー位置を指差す課題により，ピアノ演奏者がキー位置をどの程度正確に記憶しているかを測った。C4キーのみ実物大シートで示したNo-keyboard条件と，88鍵全体の実物大シート上で指示動作をおこなうKeyboard条件を設けた。Keyboard条件では正確に指示できたのに対し，No-keyboard条件では1-6cm程度の大きなエラーが観察された。参照キーから遠く離れるほどエラーが増大し，また右手もしくは右側の空間よりも，左手もしくは左側の空間でのエラーが大きかった。</p>
9. ラウンドテーブル「科学が拓く音楽教育研究の可能性」	共	2011年10月23日	日本音楽教育学会第42回大会，奈良教育大学	<p>齊藤忠彦（企画・司会・話題提供者），水戸博道（指定討論者），橋田光代，大澤智恵，平野剛（話題提供者）</p> <p>本人担当部分：話題提供「〈音-鍵盤位置マッピング〉から鍵盤楽器演奏技能の習得を考える」</p> <p>科学が拓く音楽教育研究の可能性について，齊藤の問題提起のもと，齊藤，橋田，大澤，平野が各自の研究をもとに話題提供を行い，指定討論者である水戸を中心に，音楽教育研究をすすめる上での科学の有用性，必要性，あるいはその限界や留意すべき点等について討論をおこなった。大澤は，弾くべきキー位置系列と音系列の対応誤り検出課題による，演奏の視覚運動的表象と聴覚的表象の結</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
10. 『演奏を支える心と科学』第9章「初見視奏」(翻訳)	共	2011年09月	Parncutt, R & McPherson, G. E. (編) 安達真由美・小川容子 (監訳), 『演奏を支える心と科学』, 誠信書房, pp.203-231, [原書: R. Parncutt & G. E. McPherson (Eds.) The science & psychology of music performance. Oxford University Press, 2002]	びつき研究と、この時点で実験の解析中であった鍵盤の空間的記憶に関する研究を紹介しながら、演奏技能のメカニズムを考える視点からの音楽教育への科学研究の貢献について述べた。 安達真由美, 大澤智恵 (共訳) [原文: Lehmann, A. C. & McArthur, V. "Sight-Reading"] 翻訳内容の概要: 「初見視奏は、心理学的な観点からいうと、知識、運動感覚、記憶、そして問題解決技能の大きさの差によって説明することができる。本章では、音高、リズム、アーティキュレーション、表情づけに関し、初見視奏に共通する問題を取り上げ、技術的な素養、個々の要素の練習、そして演奏のための周到な準備を通して、初見視奏をどう改善しうるのが提案した。」
11. ラウンドテーブル「音楽科教育における唱法の問題: 広島大会をふまえて」	共	2010年03月06日	日本音楽教育学会 関東地区例会, 横浜国立大学	企画, 司会: 小川昌文, 話題提供者: 鈴木慎一朗, 長谷川恭子, 大澤智恵, 小関孝司 本人担当部分: 話題提供「『音の高さ』に『名前をつけること』を考える」 学校音楽教育における階名・音名唱に関する唱法の問題について、小川の問題提起のもとに発表者が各自の研究テーマに関連させて情報提供, ディスカッションをおこなった。大澤は、関連する認知科学研究を紹介しながら、音名(絶対音名)と階名(相対音名)の名づけ方の構造的な違いに着目し、必然的に生じる認知・処理のスタイルの差異について述べたのち、それぞれの機能的なメリットと欠けている点に言及して、なぜ移動ド・固定ド論争が生まれ続けているかについての考察を述べた。
12. 研究報告「ピアノ学習における練習時の歌唱の効果」	単	2009年03月	新潟大学大学院現代社会文化研究科プロジェクト論集, 4, 95-107.	ピアノの学習における聴覚的な表象の役割を検討するため、聴覚的な表象を強化する条件として弾こうとするメロディを歌いながら練習する条件を設け、歌うことなしに練習する条件との学習の効果を比較した。結果、学習者の自己評価, 第三者による主観評価, 演奏のエラー分析の結果, 歌うことになじみの強い学習者は、歌いながらの練習でより高い学習効果を見せており、こうした学習者においては歌うことにより強化された聴覚的な表象が、演奏の学習や演奏そのものに役立っていた可能性が示唆された。
6. 研究費の取得状況				
1. 「サイズと方向の異なる鍵盤楽器の演奏における打鍵位置制御メカニズム」	単	2019年4月	科研費 若手研究 課題番号: 19K20095、研究機関: 武庫川女子大学	
2. 「ピアニストに打鍵位置を定めさせる情報のモダリティ: 注意と感覚統合の観点から」	単	2016年04月01日~2019年03月31日	科研費 若手研究 (B) 研究課題番号 16K16484 研究機関: 京都市立芸術大学	
3. 「鍵盤の空間的記憶と知覚によるピアニストの打鍵位置制御」	単	2014年04月01日~2016年03月31日	日本学術振興会 特別研究員PD 研究奨励費 研究課題番号 13J09102 研究機関: 京都市立芸術大学	
4. 平成22年度新潟大学	単	2010年08月	平成22年度新潟大	

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
6. 研究費の取得状況				
国際会議研究発表支援事業による学術奨励費 5.平成21年度新潟大学国際会議研究発表支援事業による学術奨励費	単	2009年08月	学国際会議研究発表支援事業による学術奨励費 平成21年度新潟大学国際会議研究発表支援事業による学術奨励費	
学会及び社会における活動等				
年月日		事項		
1.2023年6月- 2.2022年4月- 3.2018年4月1日-2020年3月31日 4.2017年6月-2018年3月		国際音楽知覚認知学会（ICMPC）組織委員 音楽教育学会 編集委員 日本音響学会関西支部 会計幹事 日本音楽表現学会選挙管理委員		